2000.1.12

見晴らし～ アルヴォ・ペルト「FRATRES」(Vn+Pf)

あの見晴らしに優る感覚に、僕は未だに出会っていない。

校舎の屋上から見晴らすと、自分の身体が浮き上がるような感覚がした。かすかな恐怖と、そして不思議にわくわくする感じの入り混じった感覚。吸い込まれるような、手摺の向こうから誰かに腕を引かれているような、そんな感覚だった。そして、心だけが手摺を越えて遥かな彼方へと浮遊し始める。

夢の中で飛んだ経験は誰にでもあるだろうが、それに似ている。ああ、僕はこうして飛ぶのだな、などと思う…。そして、足元には何もなく、浮き上がっているような、大気そのものとなってしまったような気がする。心地よく、そして、同時にひどく不安定な、眩暈…。

高い山の頂上に登って、広い眺望を我が物とした時とも違う…。そんな圧倒的なものではない。

もしかしたら、思春期の初めだったからこその感覚だったのかもしれない。自分そのものの不安定さが、飛び上がろうとする憧れの強さが、そのように感じさせたのかもしれない。どこへというわけではなく、とにかくどこかへ飛び上がろうとする心が。

中学校の校舎の１つは、円形型の校舎だった。内部は、円筒形というか螺旋状になっていて、その螺旋の中に、下から順に教室が仕切られていた。だから教室は、その螺旋方向に傾斜していて、席は、まるで映画館のように階段状になっていた。廊下は、教室の並びの内側にあり、建物の真中は完全に吹き抜けになっており、休み時間になると、僕はその廊下から、よく吹き抜けの底や天井を眺めたものだ。

屋上への出口は、その螺旋状の廊下をぐるぐると上って、文字通り「突き当たり」にあった。

エストニア生まれのアルヴォ・ペルトという作曲家の手になるこの曲は、ゆらめきそのもののような流れと、かすかな空気の動きのようにも思える。そして、それを聴く者の前に、不思議に身近で、かつ広大な眺望を広げ、自然で、静かな飛翔を促すようだ。